

赤十字NEWS 2

Japanese Red Cross Society NEWS

FEBRUARY.2025.#1017

海外の大災害などで日赤が医療支援を行う野外病院の設備

緊急対応ユニット

病院ERU全展開訓練



特集 | ▶ P.2

これが赤十字の救援力！ 野外病院の「全展開訓練」

- A 手術室
- B 処置室
- C レントゲン室
- D 外来
- E リハビリテーション室

TOPICS

能登半島地震から1年。
支援のために移住する方も...
被災地の1月、支援者たちの想い

P.4-5

連載

万博と赤十字

P.4

献血ハートフルストーリー

P.5

AREA NEWS

〔岐阜・石川〕 足湯とハンドケアで被災者を癒やす
赤十字看護奉仕団の支援活動

〔秋田〕 秋田県防災士会と連携
防災セミナー指導者が誕生

〔京都〕 民族衣装・音楽でコラボする
青少年赤十字の発表会 / 他 ... P.6-7

WORLD NEWS

トルコ・シリア地震から2年。
今なお続く赤十字の支援

P.8

PRESENT!!
『日赤の
車載用防災セット』

プレゼント!
10名様
詳しくは
P.7をCheck! ▶





これが赤十字の救援力！ 野外病院の「全展開訓練」

海外での大規模災害など、国際救援が必要とされる地に日赤が派遣する、手術・入院機能を備えた野外病院、「病院緊急対応ユニット(病院ERU)」。

昨年12月、兵庫県にて、その全ての資機材を設営・稼働させる訓練が実施されました。この訓練にはスイス・ジュネーブから、国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)と世界保健機関(WHO)の担当者が来日し、WHOが医療支援の国際基準として定めた「EMT認証」のための視察も行いました。

Interview



日本赤十字社
国際部 国際救援課 救援係長
ふじさき たろう
藤寄 太郎さん

日赤の92番目*の病院として 海外での緊急事態に備える

今回展開した病院ERUは、外来、手術、分娩、入院など、一般的な総合病院と同じ機能と資機材を備えた野外病院です。5年前には、大阪・高槻でアジアの赤十字社として初の展開訓練が行われましたが、今回は、5年前の検証によって不足が明らかになった設備や新たな資機材も投入し、リハビリテーション室やご遺体の安置所なども備えた“フル展開”が実現しました。海外の活動地の文化・習慣を尊重するため、宗教上お祈りの時間が必須な方のための「礼拝室」もあります。

訓練とはいえ、実働時と同様に設営・運営・撤収まで行い、資機材の動作確認をし、全ての機能を検証します。普段は病院で自分の担当部門のみに携わっている人も、ゼロから病院を立ち上げて機能させるために全体の運用を知り、野外病院ならではの設備を習熟しておく必要があります。

また、スタッフ間での技能や知識の継承も、今回の訓練の目的の一つです。今回の訓練には「国際救援の工

日赤の「病院ERU」全展開訓練データ		Data
ERU : Emergency Response Unit		
展開面積: 約9000㎡	参加人数: 150人以上	
テント数: 25張以上	設営日数: 3日間	
資機材の総重量: 約50トン	訓練日数: 5日間	

キスパート”、海外でのさまざまな活動実績を持つ方が多数参加しています。まだ経験の浅いスタッフが経験豊富なスタッフから多くのことを吸収し、日赤の国際救援の経験を引き継いでいけたらと考えています。

私自身、過去に海外の赤十字社が運営する野外病院を視察した経験がありますが、そこはまさに、もう一つの現地の病院として機能していて、多くの患者を受け入れ、その土地の医療機関の補助として必要不可欠な施設でした。日赤は全国に91の病院を運営していますが、この病院ERUが“92番目の病院”として、自信を持って日本から送り出せるよう備えるのが使命です。参加職員は皆がその使命の大きさを十分理解していて、医療職以外でも、通常は血液センターで献血や血液製剤に関する業務に従事する人が自ら電気工事士の資格を取得し、この資機材の担当として海外に派遣される際には力を発揮できるように備えているなど、提供する支援の質や確実性にもこだわっています。多くの病院・医療スタッフを抱えている日赤の強みを生かし、この病院ERUが、国際的に人々を救う存在になるために、今後も訓練を重ねていきます。



(写真左) WHO、IFRCの認証チームと挨拶する日赤職員、(下) 認証フラッグを掲げる日赤職員



? EMT認証とは

EMT認証とは、WHOが、Emergency Medical Team=緊急医療チームとして一定の水準を有することを認める制度です。大規模災害が発生した際に、その国・地域外から入った医療支援チームの能力や質に差があることから、この統一基準が設けられました。この制度の策定には、海外救援の経験値が高い赤十字も協力しました。近年では被災国が、EMT認証取得の有無や必要となるチームのタイプを支援側に提示することが、国際医療支援のスタンダードになっています。EMT認証制度の策定に貢献した赤十字ですが、赤十字としての独立性を守るために、赤十字の病院/診療所ERUは、WHOから直接、認証を受けるのではなく、WHOの定めた国際基準を満たしていることをIFRCが認証します。

*2025年1月時点



① IFRCの認証チームのリーダーから質問される日赤看護師。EMT認証のため、認証チームは実際に病院ERUの内部を視察 ②患者役として数十人の日赤看護大の学生が参加。訓練の説明を受ける ③テントの撤収作業を行う日本赤十字広島看護大学の学生(赤い帽子)

Interview



日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院
国際医療救援部 副部長 兼 看護部 副部長
せきづか みほ
関塚 美穂さん

普段の病院と変わらない医療の質を担保するために

この訓練では、病院ERUの運営全体の管理者であるヘッドナースという役割を担いました。今回のような100人以上のスタッフが活動する大規模な野外病院の全容の把握は困難ですが、感染症アウトブレイク時や緊急時など、いざというときにリーダーシップを取る必要があります。いかなる場合でも、患者さんを置きざりにすることはできませんし、スタッフも守らなくてはなりません。そのためにはどうしたらよいかを考えながら、各テントを回って細部を確認しました。

また、今回はWHOが定める「EMT認証」をクリアすることも目標の一つに掲げています。長年、国

際救援・災害救護に関わっている日赤が他のチームのロールモデルになることは、私たちが目指すべき姿であり責務でもあると考えます。緊急対応といえども、「災害時だからこのレベルでいい」ということはなく、被災した方々の命と尊厳を守るという使命のもと、質の高い医療とサービスを提供するために、今後も努力を続けていきます。



④感染症の専門家、古宮伸洋医師(日赤和歌山医療センター)が外来テントで診察 ⑤入院患者ベッドの横には患者の状態を記載したホワイトボードがあり医療者たちはそれを確認しながら対応に当たる



大阪赤十字病院
助産師
あらい のぞか
新井 暢さん

中学生のころ、途上国で働く助産師の姿をテレビで見て深く感銘を受けたことが、この職を志したきっかけです。紛争や災害の厳しい状況下では、女性や子どものケアが必要になります。病院ERUには分娩室もあり、助産部門の訓練は重要だと思い、今回の訓練に参加しました。



日本赤十字看護大学
広尾キャンパス
大学院生 修士課程1年
すがわら みわ
菅原 美和さん

私は、DMATの資格も持つ看護師です。国際救援、災害看護に関わる仕事がしたいと思い、現在は日赤看護大学の大学院で国際災害看護学を学んでいます。まだ実際の国際救援の経験がなく、病院ERUの訓練も初めて参加しました。このようにさまざまな診療部門と資機材を備え、海外で医療支援を展開できることは日赤の強みだと感じました。



熊本赤十字病院
看護師
こばやし けん
小林 賢吾さん

救援の現場で、いざというとき、資機材が一つ不足するだけで患者さんの命が救えない場合もあります。5年に1回の実証訓練です。この訓練を完璧に行うぞと、皆が真剣に臨んでいます。自分たちが作成した手順書や資機材に不足がないか、一つ一つ確認し、話し合い、課題も見つかりました。これで患者さんの命を救えるか?と問い続け、答え合わせをしていく訓練でした。



日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院
国際医療救援部 理学療法士
なかしま ひさもと
中島 久元さん

傷を負った方々が日常生活に戻るためのリハビリ提供を

私は、理学療法士として紛争中のウクライナに5度派遣され、リハビリ支援を行いました。現時点で、ウクライナに理学療法士を派遣している赤十字の姉妹社は日赤を含め限られますが、脊髄損傷や足の切断など、負傷した方々が日常生活に戻るためのサポートとして、リハビリテーションはとても大切です。

今回の病院ERU展開訓練では、以前はなかったリハビリテーション室も含まれ、緊急救援という枠組みの中でも、リハビリが重要な要素として捉えられていることを非常にうれしく思います。リハビリだけでなく、検査や放射線など、さまざまな部門が加わったこの病院

ERUは、日赤のチーム医療の強みが存分に生かされたユニットです。患者さんや受益者さんの回復につながるように、チームの一員として、今回の経験を生かしていきたいと思っています。



TOPICS

TOPICS

能登半島地震から1年。
支援のために移住する方も…日本赤十字社石川県支部
事業推進課長
とがし じゅんじ
富樫 純治さん明日を生きる力は
支え合う、温かな
コミュニティから

昨年元日の地震から1年がたちました。地震発生の日夕方、石川県支部に参集し、救護活動を展開するための災害対策本部を立ち上げたことを昨日の出来事のように覚えています。今年の正月は、まさかと思いながら再び何か起きるのではという不安があり、何事もなく新年を迎えることができて、ほっとしています。



2024年1月2日、石川県支部の災害対策本部会議で被災状況を説明する 富樫さん(中央)

いま被災地では、ライフラインの復旧も進み、営業を再開するお店も増えて、復興に向けた良い動きもありますが、まだまだ苦しい状況もあるのが現実です。なんといっても、被災地の方々にとって筆舌に尽くしがたい苦難だったのは、正月の地震から復興へ向けて歯を食いしばって頑張っているところに9月の水害が起きたということ。**なぜ私たちがばかりがこんな目に…**という声も聞かれた一方で、日赤の救護班として避難所を巡回して感嘆したのは、地震後の経験をもとに、皆さんが力を合わせて上手に避難所運営をされていたこと。**どこの避難**

被災地の1月、支援者たちの想い

所も生活の样に助け合いの心が見て取れ、その強さに心を打たれました。

地震発災以降、石川県支部では赤十字防災セミナーの依頼が増えました。受講者からは、避難所がどういう状況であったか、日赤の支援の動きなど、具体的な質問が挙がり、防災意識の高まりを感じます。受講した方からは「もっと早く受講すればよかった」という声が聞かれ、受講後のアンケートにも被災を自分ゴト化して向き合う姿勢が見受けられます。一方で、日赤職員を含めて、県内には自分や親族・友人が被災した経験を持つ方も多く、防災セミナーで使用する災害の写真などでつらい思いをさせないよう、注意深く進めています。石川県内の赤十字ボランティアの活動も時間と共に変化しました。発災直後は炊き出しが主でしたが、**現在の主な活動は「交流の場づくり」**。県内・県外の赤十字ボランティアが仮設住宅などを訪れ、住民のコミュニケーションの場として、足湯やハンドケア、茶話会といったお楽しみ企画を行っています。

災害によって地域を離れざるを得ない人もいる中、これから目指すべきは、**地域に残る人々が自立して支え合う関係が育ち、温かいコミュニティを形成すること**だと感じています。復興も、大きなにぎわいや活気があることにこだわらず、コンパクトサイズでもいいじゃないですか、人々が幸福で安心して生活できれば。そういうコミュニティ形成の支援にも赤十字として関わっていけたら、と考えています。



災害後に実施した防災セミナーで「ひなんじょたいけん」をレクチャーする富樫さん(左)



震度6強の地震と津波、二つの被害に見舞われた石川県珠洲市宝立町の鶴岡地区

石川県
赤十字ボランティア
しまやま つねのぶ
嶋山 恒信さん被災地に移住し、
2足の草鞋で
ボランティアも継続

金沢市から珠洲市に移り住んだのは昨年8月。定年退職をしたタイミングで、移住して被災地の支援を続けたいと思い、珠洲市の社会福祉協議会(社協)の嘱託職員に応募し、住まいとして農家民宿の一部屋を借りました。

支援を続けるなら珠洲市で、と決めていました。**珠洲は、地震・津波と二重の被害がありましたが、地理的な問題、支援の届きにくさから、ひときわ復興が遅れていた地域**。私はもともと赤十字ボランティアで、能登半島の被災した各地に救援物資の配布や日赤救護班の帯同で何度も訪れ、被災地の状況を



9月の水害では、被災地の状況に詳しい嶋山さんのアドバイスが救護活動に生かされた。金沢赤十字病院の救護班メンバーと、嶋山さん(中央)

目の当たりにしました。昨年の1月・2月は、定年退職前の有給休暇の消化とボランティア休暇を組み合わせ、赤十字の支援活動で被災地を回る日々でした。

9月の大雨災害のときは家族のいる金沢に帰省していて、水害のあった珠洲へ戻ることはできませんでした。私が住んでいた農家民宿も被害に遭い、もし珠洲にいたら私も被災者の一人になっていたかと。水害が起きていると知ったとき、すぐに日赤石川県支部に連絡を取り、その後、輪島を拠点とした救護活動に協力。輪島・珠洲周辺の通信状況やルートなどを把握していたので救護班の運転手を務めました。私が赤十字ベストを着て活動していたら、たまたま珠洲市の社協の人と会い、「本来はこっち(赤十字)の人なんだよ」と言ったら驚かれましたね。

私は現在、社協が開設する「珠洲ささえ愛センター」の職員として、被災された方々の生活再建を目指し、仮設住宅や在宅(自宅)避難者の巡回訪問のほか各地域でのコミュニティサロン(茶話会)などもお手伝いしています。また同時に、仕事が休みの日には災害ボランティアセンターでもボランティアをしています。地震から1年となる年末年始は、珠洲を離れ、別の地域の親族の家で過ごす方もいて、やはり、普通の年末年始と違う、緊張した空気がありました。それでも、年明けの茶話会では、始終穏やかで笑いも交えながら、それぞれの近況や思いを語り合うことができました。今も仮設住宅や解体・修繕を待つ自宅を暮らす方は多く、地域とのつながりが薄くなりがちな環境で、孤立してしまうことを防ぎたいという思いで活動しています。

いま珠洲は、災害後の復旧作業に携わる人も減り、とても静かです。でも、これが本来の珠洲の姿だとも思います。住む人が少なくても、**そこに住む人にとっての幸せがあることが大事。私たち支援の手がいずれ離れても、現地の人々が自立して、幸せな生活を送っているようになることが目標**です。



「珠洲ささえ愛センター」が主催した新年の茶話会。仮設住宅の方々と、嶋山さん(中央)

vol.
5

万博と赤十字

2025年4月に開幕する大阪・関西万博には、赤十字の理念を伝える「**国際赤十字・赤新月運動**」のパビリオンも出展されます。本連載では万博と赤十字の150年以上にわたる関係をひもときます。



©Expo 2025

title 赤十字への理解を深める 万博特設サイト情報更新中！

4月13日に開幕が近づく大阪・関西万博。「国際赤十字・赤新月運動館」は国際機関のパビリオンが立ち並ぶ一角に出展します。万博で発信する赤十字の人道活動のエッセンスを伝えるため、開幕に先駆けて開設した特設WEBサイトでは、国際赤十字・赤新月運動とは何か?に始まり、これまでの、そして今この瞬間も世界中で走り続けている赤十字の人道活動について、その一部を紹介する記事や、万博会場で体験できるコンテンツの紹介、最新のニュースを掲載しています。

イスラエル・ガザ、ウクライナ、シリアそれぞれの地域の人道危機を取り上げたページでは、**世界各地の人道支援の最前線**で「いのちと健康、尊厳を守る」活動を展開する**赤十字の姿を紹介**。また、2011年の東日本大震災を経験した日赤看



護師へのインタビュー、2018年西日本豪雨災害で日赤職員が感じたメッセージなど、被災地での支援活動での経験を、未来に生かしていこうとする赤十字関係者の姿に焦点を当てた記事も

公開。体験型のパビリオンのコンテンツと合わせて、「**人間を救うのは、人間だ。**」という日赤コーポレートスローガンの核心に迫るサイトとなっています。ぜひ、特設サイトをご覧ください。

特設
WEBサイトは
コチラ！

vol.14 献血ハートフルストーリー

このコーナーでは、血液事業に携わる日赤職員、ボランティアさん、献血協力者などの人たちが、日々どのような思いで血液事業に取り組んでいるのかを紹介していきます。

献血バスから、温かい思いが広がるように



今月のひと

profile
広島県
赤十字血液センター
献血推進課
ひらた なおひと
平田 直秀さん

私は献血バスの運転をすることになって12年目、1日に2カ所の献血会場を回ることもあり、毎月約30カ所の会場に伺います。

バスの運転担当と言っても、運転は業務全体の2割くらい。献血会場では、バスの前にテントを設営し、受け付けの誘導や接遇も行います。まれに献血後に体調不良になる方がいるので、献血者の

顔色にはいつも注意を払い、定期的に救急法の基礎講習を受けて、いざというときにためにバスに積んでいるAEDの使い方まで習得しています。

実は血液センターに入職するまで、私には献血の経験がありませんでした。そんな私が月に1回ほどのペースで献血をするようになったきっかけは、この仕事で出会った「まひろちゃん献血」です。3歳で急性白血病を発症し5歳で亡くなった「まひろちゃん」。その子の父親の草野球チームの仲間が献血を呼びかける活動を始め、それが「まひろちゃん献血」という名で広まりました。暑い日も寒い日も懸命に献血の呼びかけをする人たちの姿を見て、**この仕事に携わる自分が何もしないでいいのか、献血に協力して下さる方に頼るだけでいいのか、そう思ったら、献血せずにいられませんでした**。

献血するようになって感じたのは、献血に対して関心のある人となない人が二極化して、中間がない、

ということ。かつての私のように、世の中に献血というものがあると日常で意識することがない人と、熱心な人、その中間で、**すぐに献血しなくてもその大切さは知っている、という人を増やすことが大切ですね**。この仕事で、私は人との接し方が変わりました。また献血に協力したいと感じ、温かい気持ちを持ち続けてもらえるよう、私にできることを、献血バスで頑張っていきたいと思っています。

献血バス
運転中



Area News

エリアニュース

全国各地、あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は行われています。



足湯とハンドケアで被災者を癒やす 赤十字看護奉仕団の支援活動



日赤岐阜県支部の赤十字看護奉仕団は、能登半島地震から1年を前にした昨年12月21日、避難所となっている輪島市立鳳至小学校体育館を訪れ、被災者に足湯サービスと癒やしのハンドケアを行いました。そこで避難生活を送るのは、昨年1月の地震後に生活していた仮設住宅が9月の大雨で水没してしまい、新たな避難生活を余儀なくされた方々。適温の足湯に浸かってもらいながらハンドケアを行った後は、岐阜銘菓『柳ヶ瀬』とお茶を振る舞い、身の上話を耳を傾け、最後は、岐阜にまつわる『柳ヶ瀬ブルース』の音楽に合わせて軽い体操を行いました。参加した方々は、「足湯で体が温まった」「ハンドケアが気持ちよかった」と話し、表情も明るくなったようでした。



9都県の青年赤十字奉仕団が SNS投稿リレーで連携



SNSリレー投稿では各県がご当地グルメのレシピを紹介。Instagramで「#ご当地献血メシ」で検索を!

11月23日から24日、栃木県宇都宮市内のホテルにて、第2ブロック(栃木、茨城、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川県、新潟、山梨の9都県)支部青年赤十字奉仕団連絡協議会を開催しました。この協議会は、ブロック内の青年赤十字奉仕団代表者と支部担当者が一堂に会し、活動の課題などについて情報交換を行い、活動の活性化を図ることを目的としています。当日は、奉仕団内の引き継ぎルールやInstagramを活用したSNSリレー投稿の実施について協議するとともに、群馬県のバルーンアートや栃木県の足湯など、体験も行っており交流を深めました。



JRCメンバーから高齢者へ 赤十字・愛の手紙



日赤大分県支部では、毎年12月に青少年赤十字(JRC)高校生メンバーが大分市内に住むひとり暮らしの高齢者や介護施設の利用者に温かい気持ちで新年を迎えてもらうために、手紙を届ける活動をしています。昨年の12月にも、加盟校9校173人のメンバーが参加し、214人の高齢者に向けて手紙とオリジナルのキーホルダーを作成しました。それらは、12月14日に愛の手紙実行委員会と代表メンバー13人が、民生委員と一緒に届けました。メンバーに会えることを毎年楽しみにしている高齢者も多く、直接手渡ししながら会話が弾み、温かい交流の機会となりました。



秋田県防災士会と連携 防災セミナー指導者が誕生



日赤秋田県支部では、昨年11月30日から12月1日、日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学にて、日赤防災教育の指導者を養成するための研修を開催しました。

参加者は、秋田県防災士会21人と赤十字ボランティア3人の計24人。全員が各カリキュラムや講義、演習を修了し、新たな指導者となりました。受講者からは、「各カリキュラムを実際に体験することで得られた気づきや学びがたくさんあった」「指導する側の情報が分かりやすく、今後に生かしていきたい」という感想が聞かれました。

秋田県防災士会と日赤秋田県支部は、昨年度に連携協定を締結しています。災害時に迅速に対応できる体制の確保や、防災・減災に関する知識の普及など、さまざまな取り組みの推進を共に進めていて、今回の研修もさらなる協力強化の機会となりました。



12月は「NHK海外たすけあい」。 各地で活発な街頭募金活動



日赤とNHKが毎年実施する「NHK海外たすけあい」。今年も、多くのボランティアが各地で募金活動を行いました。

日赤香川県支部では、12月7日に高松駅と高松丸亀町商店街、高松兵庫町商店街で募金活動を実施。県内の青少年赤十字(JRC)加盟4校の児童・生徒や、高松市赤十字奉仕団、青年赤十字奉仕団のメンバーなど総勢約110人が街頭で募金を呼びかけるとともに、赤十字の海外活動の周知を行い、総額13万5130円が集まりました。(①②)

民族衣装・音楽でコラボする 青少年赤十字の発表会



11月22日、青少年赤十字加盟校である京都市立養正小学校で学習発表会が開催されました。同校は、在日コリアンの生徒たちが韓国・朝鮮の言語や文化・歴史を学ぶ民族学級(コリアみんぞく教室)が設置されている学校でもあり、「多文化共生」をテーマに、国際理解・親善に関する活動にも取り組んでいます。今回の発表会では、民族学級の生徒5人と5年生がコラボし、伝統的な衣装を身にまとい、プク(太鼓)やチュルコンノリ(リボン舞)を披露したり、アメリカ南北戦争時代の曲「こげよマイケル」を演奏したりと、世界のさまざまな文化に焦点をあて、迫力満点の舞台を繰り広げました。発表を終えて、教頭の木村先生は、「いろいろなルーツを持つ生徒が多い学校だからこそ、異文化の理解だけでなく、お互いを受け入れる社会について考えてほしい」と語りました。

栃木県支部では、12月8日、宇都宮市内の商業施設・ベルモールで、県内JRC加盟9校のメンバーや青年赤十字奉仕団員など総勢約50人が街頭募金を実施。クリスマスシーズンを控え、赤いサンタ帽やトナカイのカチューシャを身につけ、海外で苦しむ人々を救うための橋渡しとなることを一人一人が理解して積極的に協力を呼びかけ、総額8万6643円が集まりました。(③④)

集まった寄付は、世界各地の紛争、自然災害など、支援を必要としている人々のために役立てられます。

今年も3月は「ACTION! 防災・減災」プロジェクト 災害 いま備えれば 守れる命がある



近い将来に発生が予測されている国難級の大規模地震。また昨今は、気候変動の影響により水害などの気象災害も頻発しています。大きな災害が発生したとき、被害をできるだけ小さくして自分や家族の命を守るためには、日頃から「自助」の備えをし、周囲の人々と助け合う「共助」の理解を深めておくことが大切です。

3月の「ACTION! 防災・減災」プロジェクトは、「いのちを守る適切な避難行動」をテーマに災害への備えを訴えます。

災害の種類や規模、災害発生時に自分が置かれている状況などによって、適切な避難行動はさまざまです。今回のポスターは、在宅時に地震が発生した場合を想定し、あらかじめ家具の配置や安全対策を講じていただくことを目的とした赤十字防災セミナー「おう

ちのキケン」を題材に制作しました。ポスター上部では、お子さんやそのご家族と日赤職員が家のどこかに危険が潜んでいるのか、考えるシーンを、ポスター下部では、アンバサダーである俳優の白上萌音さんと日赤の職員やボランティアが真剣なまなざしで災害への備えの大切さを訴えています。

今回のテーマに基づいて、特設サイト「SAVE365 Magazine」では「避難あるある図鑑」と題して避難に際して思わずしてしまう判断のミスや迷いをチェックできるコンテンツをお届けするほか、雑誌「anan」とタイアップして日赤職員が自身の防災リユックの中身を公開。家族構成や経験に応じて普段から準備している防災グッズを理由とともにご紹介します。同特設サイトは2月20日公開予定ですので、ぜひご覧ください。



日赤の車載用防災セット

非常用トイレ、長期保存水など車に常備しておきたい防災アイテム16点がこの1箱に!

10名様

オンラインショップは
こちら



日赤サービス
nisseki service Co., Ltd.

プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・WEBでご応募ください。

①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS2月号を手に入れた場所(例/献血ルーム)

⑥2月号読者アンケートの回答

※ご応募いただいた個人情報はプレゼントの発送および弊社からのお知らせのみに利用いたします

〈⑥ 2月号読者アンケート〉質問項目

[A] 日赤の「会員」ですか

ア. 会員(年間2千円以上の寄付を継続している。但し、義援金を除く) イ. 会員ではない

[B] 赤十字について知っている活動はどれですか※下記選択からA~ケの文字をご記載ください。複数選択可

イ. 国内災害救護 エ. 国際活動 ウ. 赤十字病院 オ. 救護師等の教育 カ. 献血(血液事業) キ. 救急法等の講習
ク. 青少年赤十字 ク. 赤十字ボランティア ケ. 社会福祉

[C] 今月号の赤十字NEWSをお読みになって、以前よりも赤十字活動全体についての理解が深まりましたか

ア. とても理解が深まった イ. ある程度理解が深まった ウ. すこし理解が深まった エ. 以前と変わらな

[D] 興味・関心を持った記事・企画はどれですか

ア. 特集 イ. TOPICS ウ. 万博と赤十字

エ. 献血ハートフルストーリー オ. エリアニュース

カ. プレゼント キ. ワールドニュース

[E] 赤十字NEWSの適切な大きさは

ア. 今のまま イ. A4サイズ ウ. 小冊子(A5 148×210mm) サイズ

[F] 赤十字NEWSの発行回数は何回がよいですか

ア. 月に1回 イ. 2カ月に1回 ウ. 3カ月に1回 エ. 半年に1回

[G] 赤十字NEWSの記事をスマートフォンやパソコン(オンライン)で読みたいですか、
いままでどおり紙で読みたいですか

ア. オンライン イ. どちらかというオンライン

ウ. (オンラインと紙の)両方 エ. 紙 オ. どちらかという紙

[H] その他、赤十字NEWSに関するご意見、ご要望(任意)

郵送/〒105-8521東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS
2月号プレゼント係

WEB応募/下の二次元コードからご応募ください。

2月28日(金) 消印有効

※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

ご応募は
こちらから





トルコ・シリア地震から2年。今なお続く赤十字の支援

2023年2月6日、トルコ南東部とシリアの国境付近を襲ったマグニチュード7.8の地震は、死者5万9000人以上となる甚大な被害をもたらしました。トルコとシリアの赤新月社、および国際赤十字は、発災直後から救命活動や食料・水・住居の支援、保健・医療の提供、こころのケアなど、幅広い支援を続けてきました。あれから2年、両国は新たな問題にも直面し、さらなる中・長期的支援が求められています。今回は、その現状をレポートし、日赤による支援も紹介します。



薬物依存や自殺率の上昇… 新たな課題が浮き彫りになるトルコ

地震発生後、国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）は緊急救援アピール（資金や支援の要請）を発出し、日赤を含む世界中からこれまでに約1.5億スイスフラン（約258億円）が寄せられました。このアピールは今年2月で活動対象期間を終えますが、被災地はまだ「元通り」ではありません。今もまだ、数十万人の被災者が20m²程度のコンテナ式仮設住宅で発災2年を迎えようとしています。コミュニティのつながりも薄れ、深刻な経済不安が進む中、薬物依存や自殺の増加という新たな問題も浮上しています。これまでのようなスピードや量を重視した支援からさらに一歩踏み込み、**女性・子どもや障害のある方など特に弱い立場に置かれやすい方々などの個人レベルで細分化したニーズに応えることが、今後の支援の課題**です。

日赤はこれまで、トルコ赤新月社（トルコ赤）に対して、救援物資支援や地域保健支援、給水・衛生支援、献血センター新規移転支援などを行ってきました。定期的な現地視察も継続しており、昨年11月には日赤職員がトルコ赤本社のあるアンカラと被災地を訪れました。アンカラでは発災初期に日赤から寄贈された救援車両（ランドクルーザー30台）などの管理・稼働状態を確認。この救援車両は、もともと荷台だった部分に大きな工具箱のようなものが追加され、そこに発電機などを搭載し

搜索・救助にも対応できるようアレンジされており、今後想定される災害にも対応できるよう、トルコ赤の備えに日赤からの支援が活かされていることが分かりました。

また、最も被害の大きかったとされるハタイ県では、地域保健支援として現地の妊産婦さん向けに実施されていた、母子保健をテーマにしたセッションも視察。セッションの最後にはおむつやベビーオイルなどを含む「新生児キット」の配布も行われ、日赤職員からもセッション参加者の女性たちにキットが手渡されました。最後に、トルコ赤職員のキュブラさんに、地震が起こるまで彼女が家族と住んでいたという場所に案内してもらいました。地震によって住み慣れた家も家族も亡くしながらも、トルコ赤での活動を通して人を助けることで自分の傷も癒やされたと涙ながらに語り、当時の状況とこれまでの歩みをかみしめました。視察を終えて、日赤職員の藤枝大輔さんは、**「依然として仮設住宅で生活をする被災者が多く、『この先3年はこの状況が続くのでは』という声も聞かれました。日赤としても、地域保健支援の中・長期的な継続の必要性を改めて感じました」と**語りました。



政権交代の大きな混乱の中 復興に向けて立ち上がるシリア

シリアでは、昨年12月に劇的な政権交代が起こり、国内情勢は大きな転機を迎えています。しかし、著しく悪化した経済状況と13年にわたる紛争による緊張状態、大地震の発生と、

シリアにおける人道的ニーズは高まるばかりです。IFRCは、シリアの混乱対応のため新たな緊急救援アピールを発出。これに対して日赤は500万円の資金援助を実施しました。

シリア・アラブ赤新月社（シリア赤）は、混乱の中でも救援物資や食料の配布、保健医療支援などを続けています。配布される物資の中には、トルコ赤やカタル赤新月社など近隣の姉妹社からいち早く提供されたものも多く含まれています。また、政権交代後、刑務所から解放された人々と家族の再会を実現するため、ボランティアも一丸となって情報の収集や提供など懸命な活動を展開しています。そんな中、シリア赤はX（旧Twitter）上で「これまで赤十字の七原則を胸に活動を続けてきたすべての職員やボランティアを誇りに思う。そして、**シリアの新章がすべての人にとってより良くそして公正なものとなるように、我々は一層の透明性や熱意をもって日々の活動に当たる**」と声明を出しました。

国内外で1300万人以上の難民・避難民を生み出した紛争に覆い被さるように降りかった地震の被害、そして社会的混乱と、あらゆる脅威にさらされながらも立ち上がろうとする人々のために、赤十字はこれからも支援を続けていきます。

▶ 発災2年「オンライン報告会」開催

2月6日（木）15時～、現在シリアで活動するIFRCスタッフへのインタビューなども交えて赤十字の活動を報告します。

ご参加はコチラから。終了後、録画も視聴可能 >>>



地震によりご両親とお姉さんを亡くされたトルコ赤のキュブラさん。後ろの更地はご両親の家があった場所



日本からの寄付は、日赤を通じてトルコ赤に送られその中から、障害のある被災者に電動車いすを提供



解放された抑留者が、シリア・アラブ赤新月社とボランティアの協力で離れ離れになった家族のもとへ